

三木市ヤングケアラー実態調査 調査結果報告書

令和7年3月

三木市健康福祉部子育て支援課

目次

| | |
|--------------------------|----|
| 1.調査の概要 | 3 |
| (1) 調査内容 | 3 |
| (2) 調査対象・回収数 | 3 |
| (3) 調査手法 | 4 |
| (4) 調査期間 | 4 |
| 2.調査の結果 | 5 |
| (1) お世話をしている家族の状況 | 5 |
| (2) お世話の内容 | 6 |
| (3) お世話をすることによる学校や生活への影響 | 7 |
| (4) お世話をすることの大変さ | 8 |
| (5) 相談したことの有無（相談相手） | 9 |
| (6) 周囲に期待する支援 | 10 |
| (7) ヤングケアラーの認知度 | 11 |
| (8) 支援を広げるために必要と思うこと | 12 |
| 3.考察 | 14 |

1 調査の概要

(1) 調査目的

市内の児童生徒における家族の世話の状況や、それに伴う日常生活への支障、ニーズ等を把握し、ヤングケアラーの早期把握と支援策の検討を行う。

(2) 調査対象・回収数

| 区分 | 対象者数 | 有効回答者数（回答率） |
|---------|--------|---------------|
| 小学5・6年生 | 1,158人 | 812人（70.1%） |
| 中学生 | 1,723人 | 1,212人（70.3%） |
| 高校生年齢相当 | 1,946人 | 200人（10.3%） |

1 調査概要

(3) 調査手法

- 記名式のアンケート調査で、Web環境から任意で回答を依頼した。
- 先にヤングケアラーについて正しく知るための動画を視聴し、その後回答する手順とした。

(4) 調査期間

令和6年9月下旬から10月末

※各表、グラフなどに使う「n」は、各設問に対する回答者数。



イラスト：こども家庭庁HP

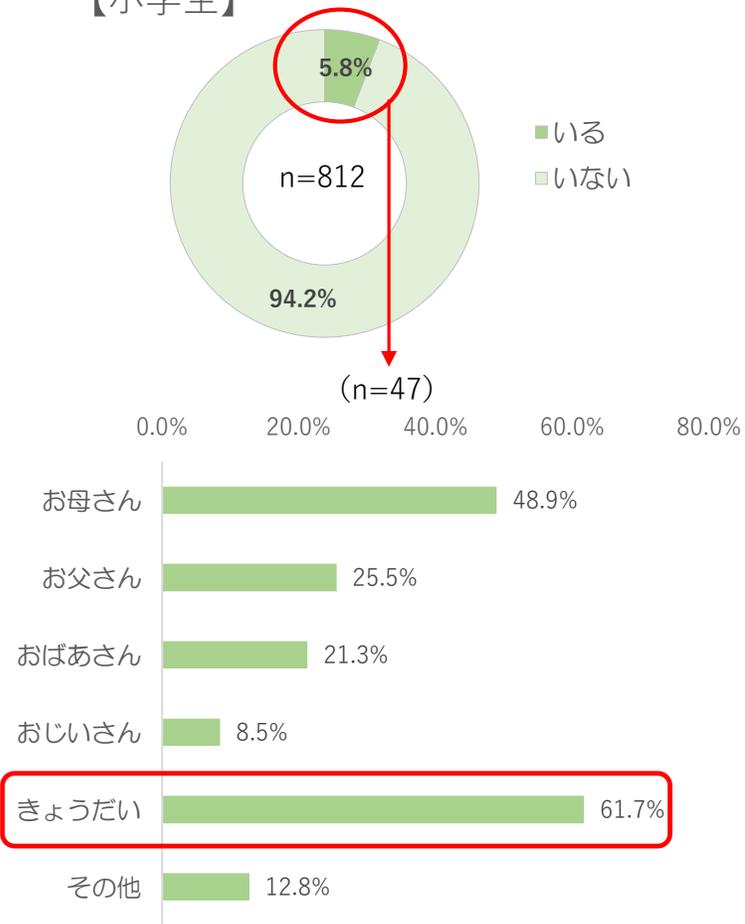


2 調査の結果

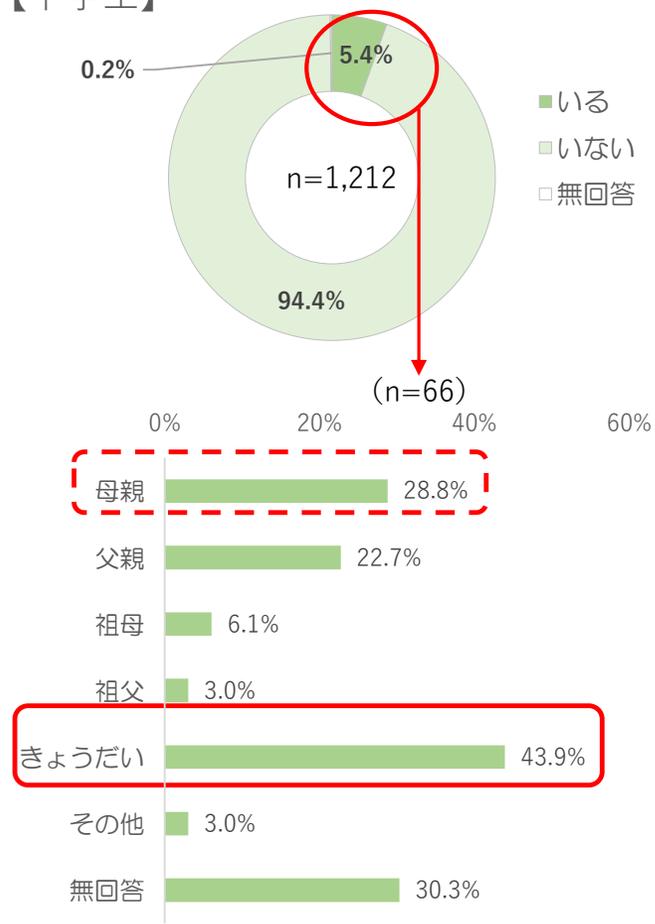
(1) お世話をしている家族の状況

お世話をしている家族がいると回答したのは、小学生5.8%（17.2人に1人）、中学生5.4%（18.5人に1人）、高校生相当0.5%（200人に1人）。きょうだいのお世話をしている割合が高い傾向がある。

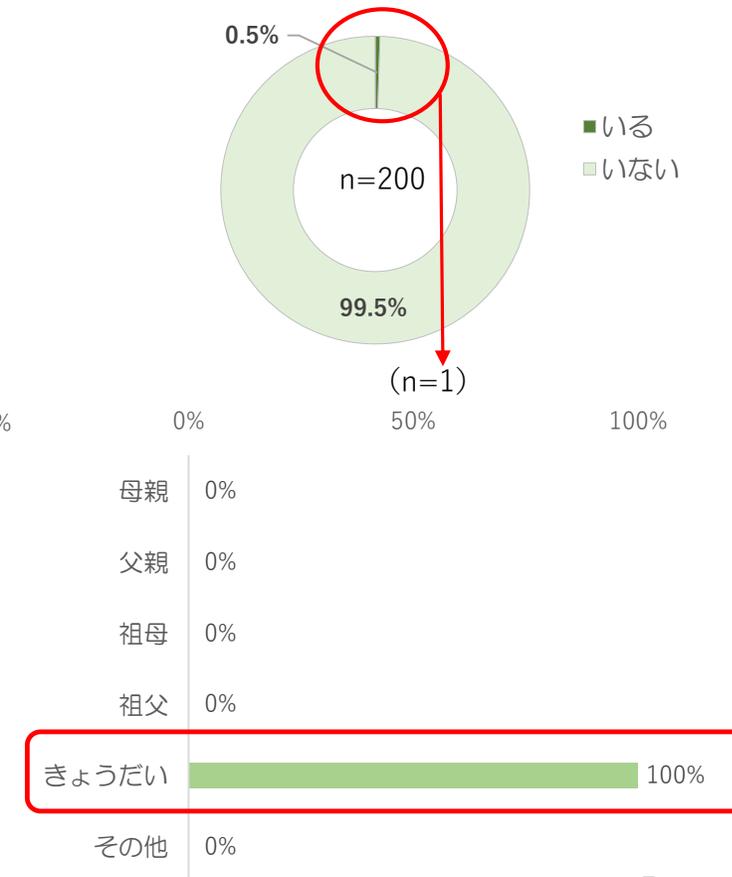
【小学生】



【中学生】



【高校生相当】

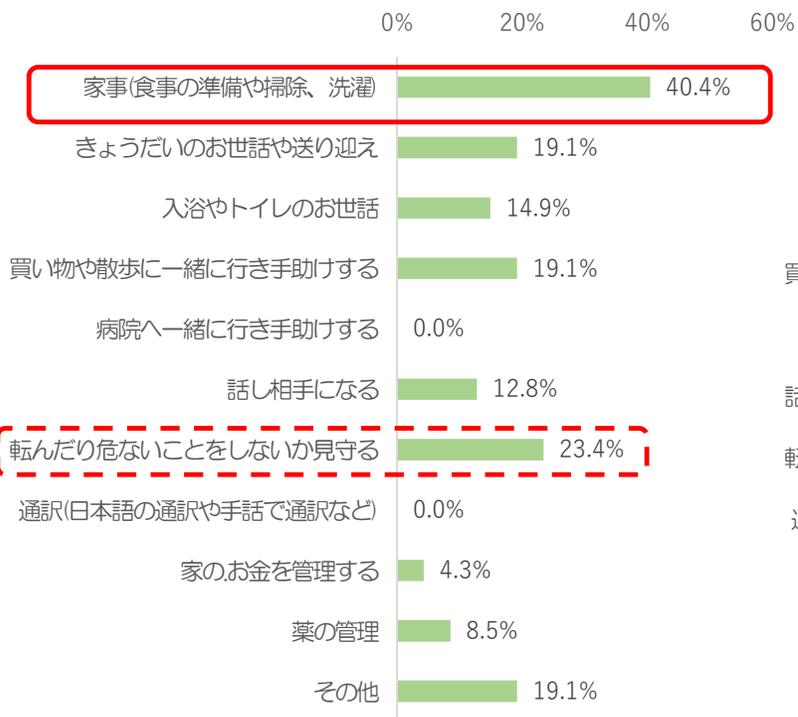


2 調査結果

(2) お世話の内容

小学生、中学生、高校生相当のいずれも「家事(食事の準備や掃除、洗濯)」が多く、全体的では次いで「きょうだいの世話や保育所へ送り迎え」の割合が高い傾向。

【小学生】 (n=47)



【中学生】(n=66)



【高校生相当】 (n=1)



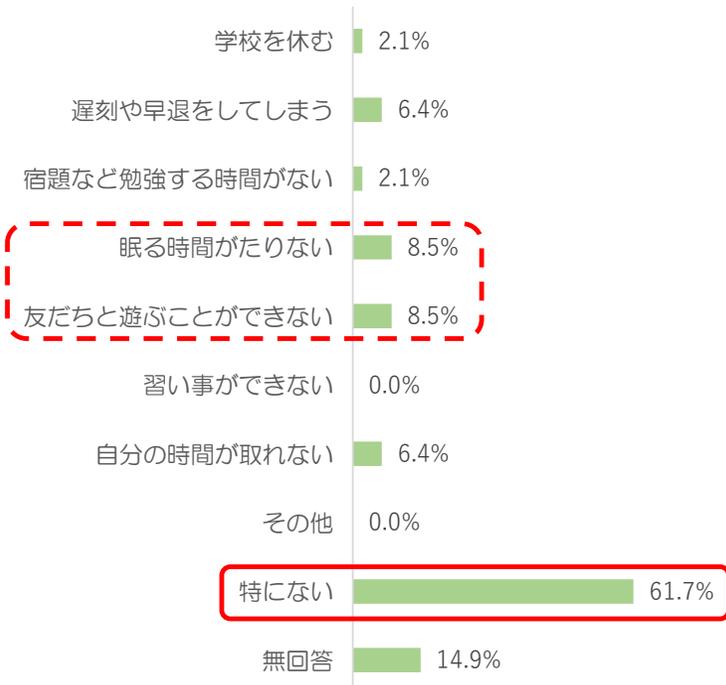
2 調査結果

(3) お世話をすることによる学校や生活への影響

お世話をすることによる学校や生活への影響について、「特にない」とする回答が最も多く、次いで小学生は「眠る時間が足りない」「友だちと遊ぶことができない」、中学生は「宿題など勉強する時間がない」などケアに負担を感じている。

【小学生】 (n=47)

0% 20% 40% 60% 80%



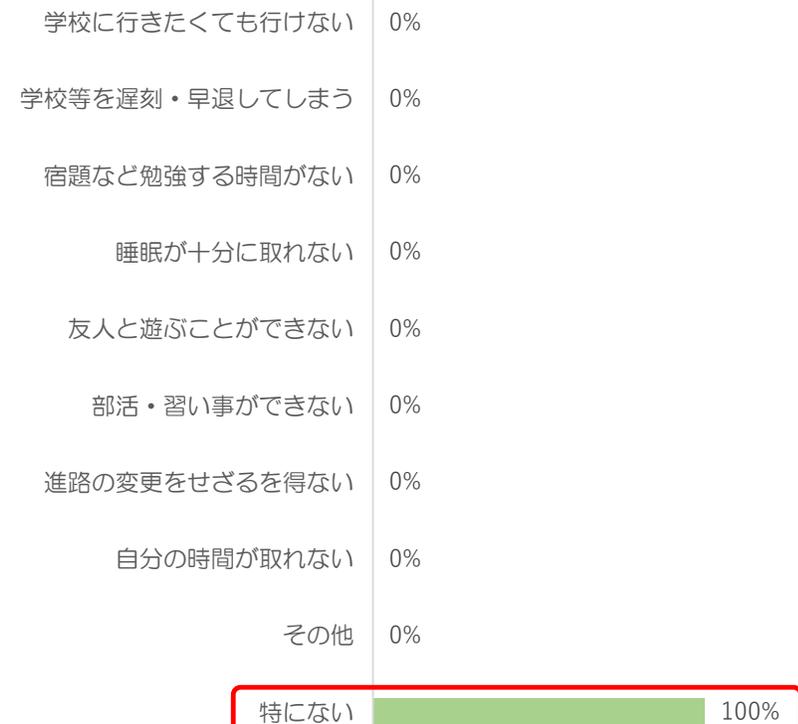
【中学生】 (n=66)

0% 20% 40% 60% 80%



【高校生相当】 (n=1)

0% 50% 100%



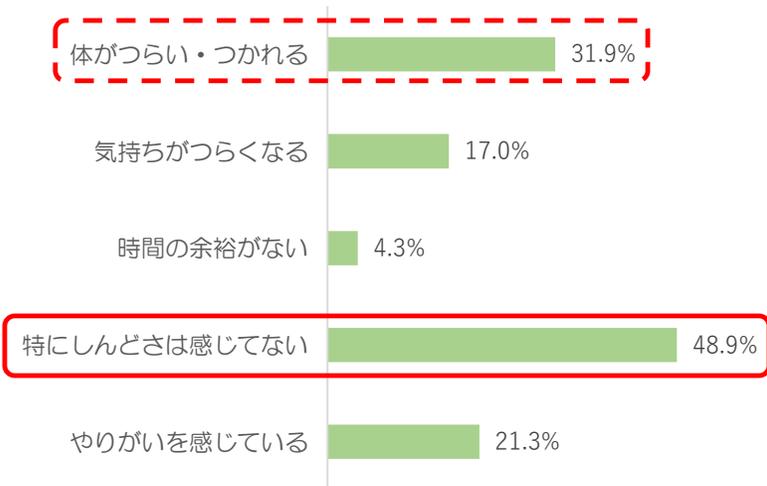
2 調査結果

(4) お世話をすることの大変さ

お世話をすることの負担感については、「特にしんどさは感じていない」と答えた割合が最も高い傾向。「やりがいを感じている」と回答する割合も全体的に高い傾向がある。身体的、精神的な負担感を感じると回答することも多い。いずれの回答にも、家族のケアが日常化している可能性がある。

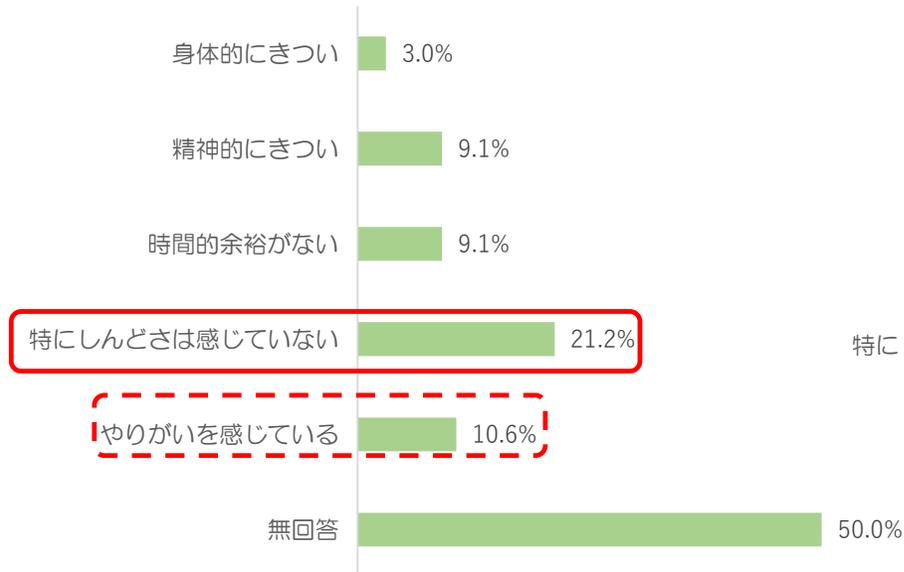
【小学生】 (n=47)

0% 20% 40% 60%



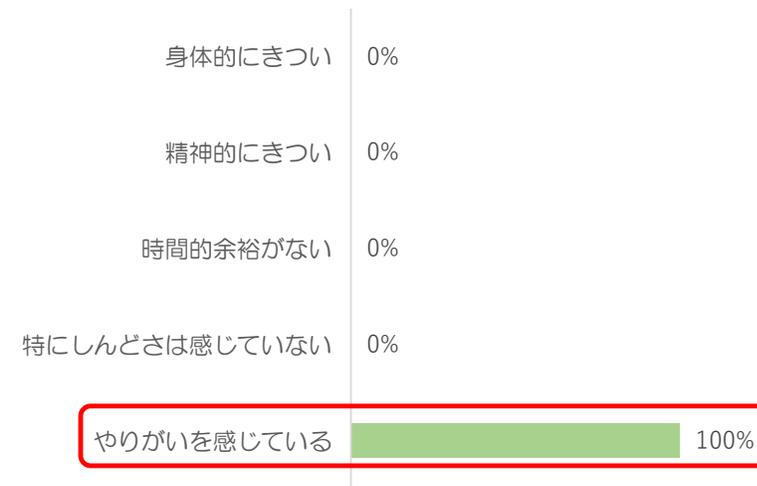
【中学生】 (n=66)

0% 20% 40% 60%



【高校生相当】 (n=1)

0% 50% 100%



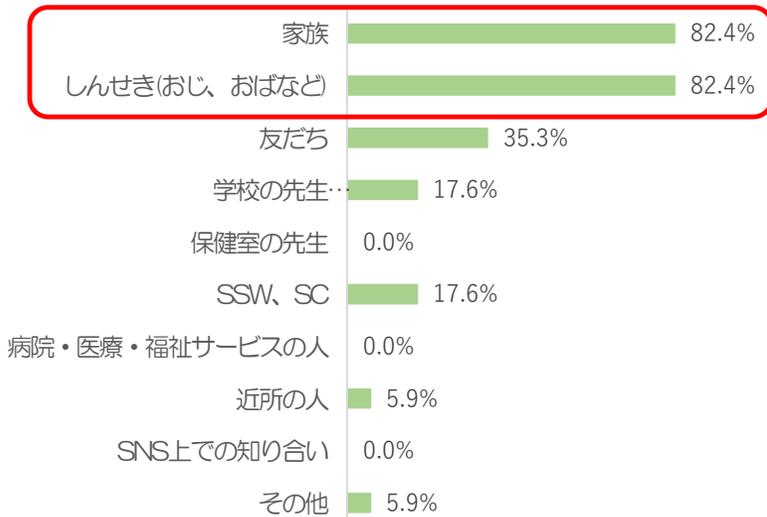
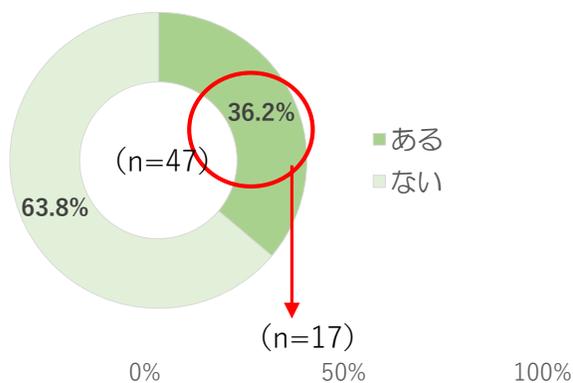
2 調査結果

(5) 相談したことの有無（相談相手）

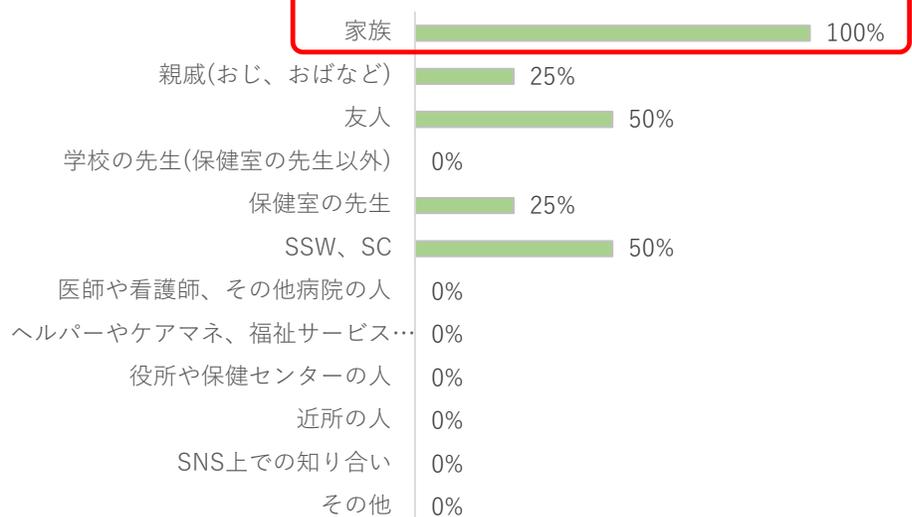
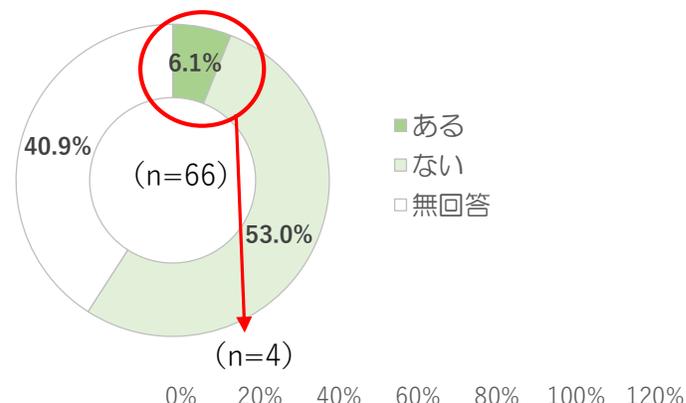
こどもたちにケアの負担が生じている一方で、お世話について相談したことがない傾向が高く、小学生では約6割、中学生は5割が「相談したことがない」と回答。また、相談相手は家族や親せきの割合が高く、家庭以外への相談割合が低い。

※SSW（スクールソーシャルワーカー） SC（スクールカウンセラー）

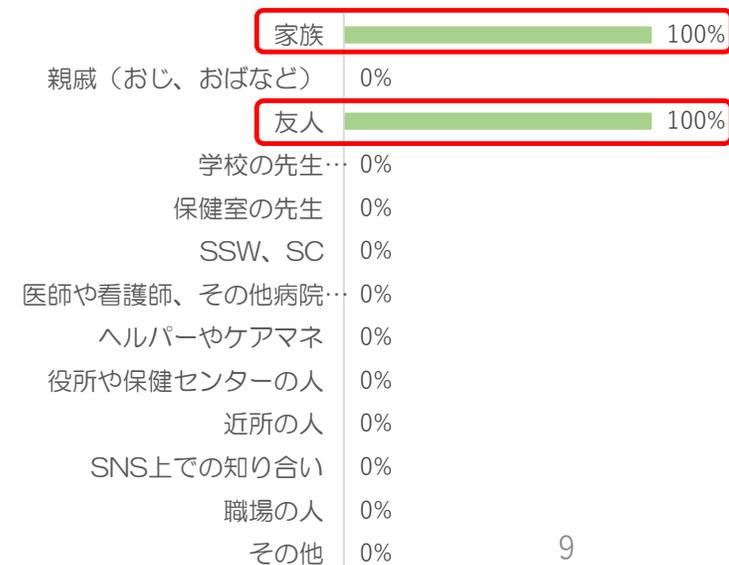
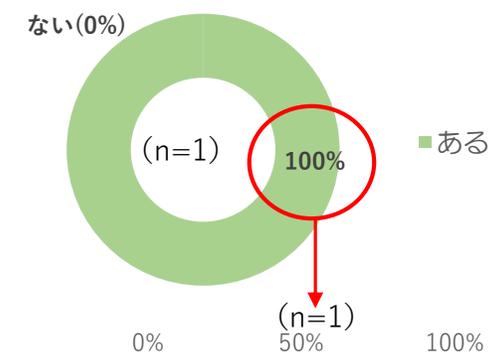
【小学生】



【中学生】



【高校生相当】



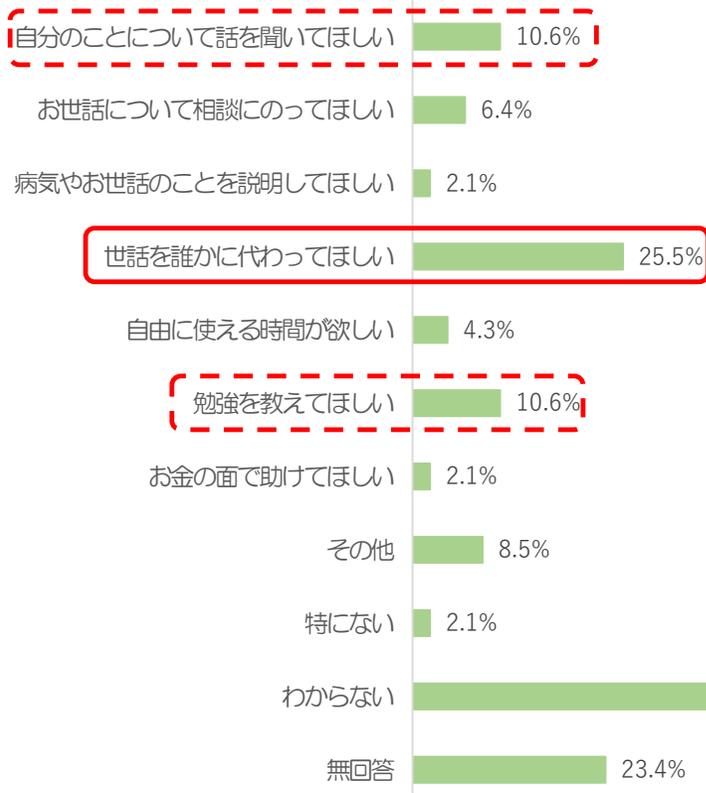
2 調査結果

(6) 周囲に期待する支援

小学生・中学生では、自分の状況について話をきいて欲しいという回答が多い傾向。勉強などのサポートを必要とする回答も一定数見受けられる。一方で、ケアに負担を感じているが、「特にない」「分からない」という回答が最も多い。

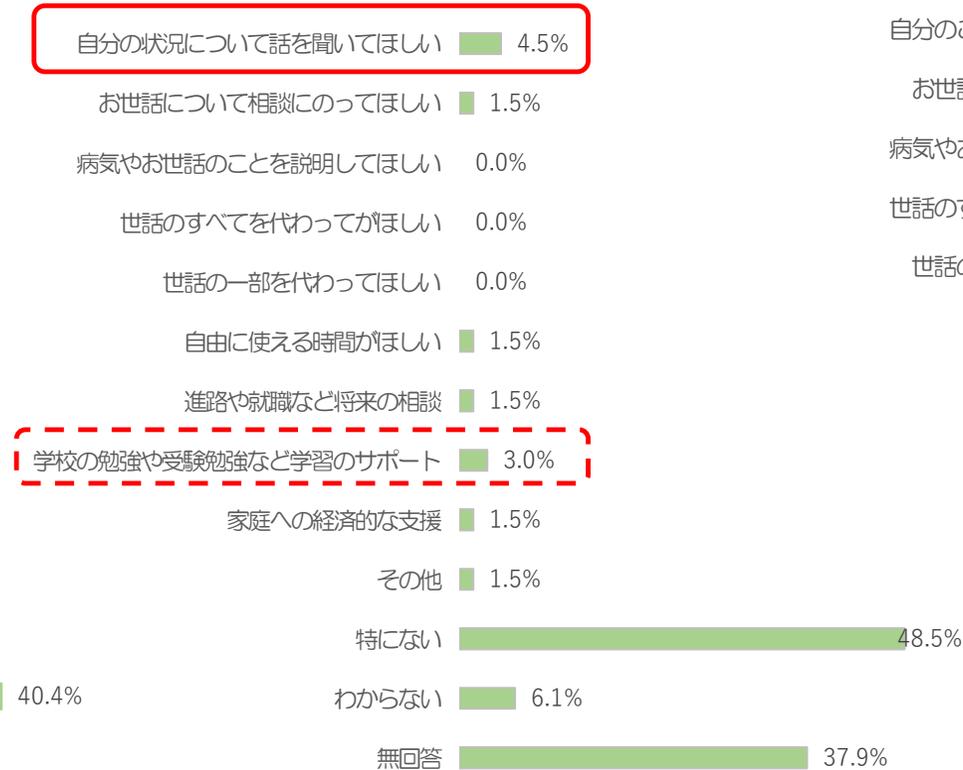
【小学生】(n=47)

0% 10% 20% 30% 40% 50%



【中学生】(n=66)

0% 10% 20% 30% 40% 50%



【高校生相当】(n=1)

0% 50% 100%

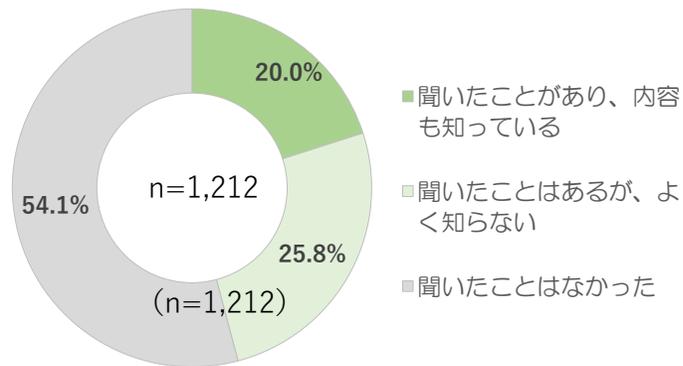


2 調査結果

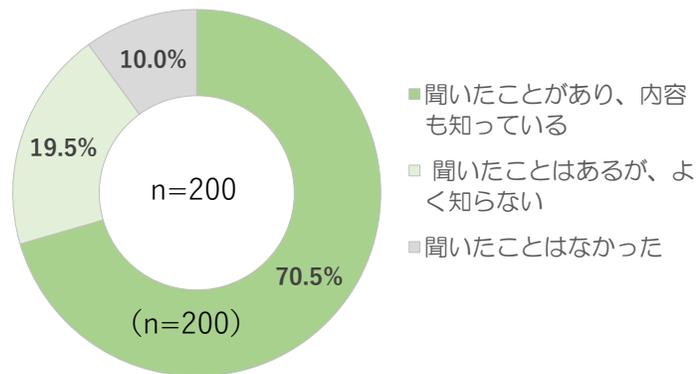
(7) ヤングケアラーの認知度

中学生・高校生相当を対象にヤングケアラーの認知度を質問。「聞いたことがあり、内容も知っている」中学生は2割、高校生相当は約7割となっている。令和2年度の国調査では、中学2年生で「聞いたことがあり、内容も知っている」は6.3%で、少しずつではあるが、認知度が高まっていると考えられる。

【中学生】



【高校生相当】



参考：令和2年度 ヤングケアラーの実態に関する報告書（MUFJ）

図表-96 ヤングケアラーの認知度

| | 調査数 (n) | 聞いたことがあり、内容も知っている (%) | 聞いたことはあるが、よく知らない (%) | 聞いたことはない (%) | 無回答 (%) |
|------------|---------|-----------------------|----------------------|--------------|---------|
| 中学2年生 | 5,558 | 6.3 | 8.8 | 84.2 | 0.6 |
| 全日制高校2年生 | 7,407 | 5.7 | 6.9 | 86.8 | 0.6 |
| 定時制高校2年生相当 | 366 | 6.0 | 7.7 | 85.5 | 0.8 |
| 通信制高校生 | 446 | 8.1 | 7.8 | 83.9 | 0.2 |

※通信制高校生は「18歳以下」と「19歳以上」の合計

2 調査結果

- (8) ヤングケアラーへの支援を広げていくために必要だと思うことや要望
中学生・高校生相当を対象に、自由記載形式で質問

啓発・理解の促進（148名）

SNSや動画、アンケート等を通じてヤングケアラーについて周知し理解することが必要との回答が最も多かった。

「アンケートや動画の配信を続けていくのが大事だと思う」
「いろいろな人の家に、ヤングケアラーの相談できることがわかるチラシを配ってほしい」
「ヤングケアラーを知っているのが当たり前になるようにもっと広めていく必要があると思った」
「チラシ・テレビ・SNSで呼びかけをする」
「ヤングケアラーの存在をみんなが理解している状況が必要」

学校の授業で学ぶ、相談する（39名）

学校の授業や講演でヤングケアラーについて学ぶ機会を持つことや相談しやすい環境についての回答が多くみられた。

「学校にヤングケアラーであることを気軽に伝えられるようにする。」
「あまり、言葉自体が浸透していないので、授業で取り上げたり、道徳などの教科書に入れて、もっと多くの人の理解を深めていくことが必要だと思う。」
「経験のある子が、学校が理解していることが1番助かると言っていました。」
「授業で動画を見たり説明をしたら、みんながヤングケアラーの大変さを知って手助けしてくれるようになると思います。」
「学校などでヤングケアラーについて悩んでいませんか？という紙を配る」

2 調査結果

(9) ヤングケアラーへの支援を広げていくために必要だと思うことや要望（自由記載）

話を聴く、寄り添う（30名）

「友達にもヤングケアラーの子がいるかもしれないから、なにか変だなと感じたら声をかけて話を聞いてあげたいです。」
「ヤングケアラーの人を1人にしないこと。」
「周りにいる人らに前と変わったところがあったりしたら話を聞く。」「大人が訪問して話を聞く。」

子ども食堂を広げる（26名）

子ども食堂を「頼れる場所」「安心できる環境」「居場所」と表現し、「子ども食堂を増やすことが必要」とした回答が見られた。

「もっと身近に子ども食堂など、誰かに助けてもらえる居場所があるといいと思う。」
「相談しやすい環境を作ることが大切。子ども食堂みたいに、そういう支援ができるところを増やしていったほうがいいと思う。」
「こども食堂のような頼れる場所や、安心できる環境を増やすことが必要だと思います。」
「こども食堂といった親が大変な時に、こどもがどう生活していくか相談していく場所が必要だと思う。」
「私の身の回りで子ども食堂を見かけたことがない気がするので、いろんなところに支援ができる場所を設けてもらいたいです。」

その他）

「国や県では、給付金を配るなどしてできるだけヤングケアラーのひとの不安や疲れをとることをしないといけないと思う。」
「ボランティア活動でヤングケアラーの方の家族の世話をしたりする。」
「気軽に行けて、相談できる場所があったら、ヤングケアラーへの支援を広げていくのにつながっていくと思います。」

3 考察

調査の結果、回答者全体（2,224名）のうち5%（114名）が家族の世話をしていると回答。

1. ヤングケアラーの 周知・理解

家族の世話をすることによる、学校や生活への影響について「特にない」とする一方で、負担感の設問では、「身体的・精神的な負担を感じている」とする回答が多くみられる。ヤングケアラーは自覚しにくい傾向があることから、過度な世話が日常的なものになっている懸念がある。

また、市内のヤングケアラーの認知度は、令和2年度の全国調査と比較すると高い結果だった。しかしながら、自由記載の「ヤングケアラーを知っているのが当たり前になるように、もっと広めていく必要があると思った」の意見のとおり、ヤングケアラーの理解が広く普及するよう引き続き周知・啓発を行う必要がある。周知の具体的な方法としては、「SNS等や動画の配信」「アンケートを続けていく」「学校の授業などで学ぶ機会を持つ」などのこどもの意見を参考に、視覚的に分かりやすい動画などを用いて取組んでいきたい。

3 考察

2. ヤングケアラーの把握

家族の世話について「相談をしない」と回答する割合が非常に高く、また「相談する」と回答したこどもは、相談相手を「家族」「親族」とする傾向があった。家庭内のデリケートな問題を「家族」「親族」以外へは相談しづらく、学校や行政などの外部の相談・適切な支援につながりにくい状況にあると考えられる。

一方で、こども自身がヤングケアラーの存在を見つけた時は、「話を聞いてあげたい」「ひとりにしない」とヤングケアラーを理解し、共感する意見があがっている。こどもたちに理解が広がり、こども自身がヤングケアラーを把握するひとつの目となり、近くのおとなに相談することも考えられる。アンケート結果では、学校関係者の中でも特にスクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーへの相談の割合が高い傾向があったことから、これらの専門職をはじめとする学校関係者等と連携し、話しやすい環境づくりや相談を受けた時の対応についての仕組みづくりをすすめていきたい。

3. ヤングケアラーの 支援体制

これまでは、こどもがより多くの時間を過ごす学校と福祉行政との連携を中心に支援体制をすすめる傾向にあった。しかしながら、アンケートでは、こども自身が子ども食堂など地域住民の活動の中に「居場所」や「頼れる大人がいる」と感じていることが分かった。こどもが安心して過ごすことができ、悩みを相談できる場、適切な支援へつなぐためのネットワークを地域全体でともに考えていく必要がある。